子どもの“気付き”の質を高める生活科学習

～“気付き”の変容を実感できる支援のあり方～

藤原　ゆうこ

生活科の学習において“気付き”とは，身近な「自然」や「社会」を，自分とのかかわりを通して再認識していく発達段階であると捉えている。その“気付き”の質を高めていく（更新していく）ためには，子どもが自らの“気付き”を自覚することがスタートとなり，その“気付き”をどのように表現するのか，仲間に伝えていくのかが大切となる。

対象との出あわせ方や環境作りを含め，子どもが自らの“気付き”の変容を通して自己の成長を実感できるための支援のあり方について，①豊かな言語力を育む，②自然体験や人とかかわる活動の充実，③科学的な見方や考え方の基礎を育む，の３つを意識して取り組むこととした。

キーワード：“気付き”の質，豊かな言語力，科学的なものの見方，自然体験

１．研究の目的

生活科における『学びの質の高まり』とは，子どもの“気付き”の質を高め，実生活へ活用・応用することをたのしむ学びであると捉えている。また，第３学年以上の教科等の学習に効果的につながる学びであるとも捉えている。

生活科の学習において，“気付き”とは，身近な「自然」や「社会」を，自分とのかかわりを通して再認識していく発達段階である。“気付き”の質を高めていく（更新していく）ためには，様々な学習活動を通して，子どもが自らの“気付き”を自覚することがスタートとなる。そして，その“気付き”をどのように表現していくのか，仲間にどのように伝えていくのかが大切となる。子どもが自らの“気付き”を自覚し，すなおに表現し，自信を持って発信し，なかまと共有し合うことで，“気付き”の質を高めあうことにつながるのではないだろうかと考えた。

生活科における“気付き”には「階層がある」と捉え，より高次な気付きへと向かわせるためことが“気付き”の質の高まりにつながると考える。子どもが自らの“気付き”の変容を通して自己の成長を実感できるための支援のあり方について，研究していきたい。

①感覚的な気付き→「ちょうちょみたいな芽が出たよ」
②発見的な気付き→「前とはちがう大きな葉っぱが出たよ」
（比較・関連づけ）
③思考的な気付き→「お水をあげたから元気になってぐんぐん大きくなったよ。お水が大好きなんだね。」
（理由付け・因果関係）
④再認識の気付き→「花がたくさん咲いたのは，新しい種をいっぱい育てているからだね。そのためにお水が大切なんだね。」
（再認識・更新の気付き）

『小学校　新学習指導要領の展開』
木村義彦　編著　明治出版

２年生の子どもたちに，学習を通して，「自分はこんなに変わったんだ」と変容を実感させるための手立て（支援の方法）として次の３つの方法でさぐっていきたい。１つ目は，表現活動を重視するために「言語力を育み，豊かな表現力を身につけること」である。２つ目は，単元設定の工夫や対象との出会いにかかわって，「自然体験や人とかかわる活動を充実させること」である。そして，３つ目は「科学的な見方や考え方の基礎を育む」でる。

２．研究の方法

２．１．言語力を育み，豊かな表現力を

２年生の子どもたちと日々の学習活動を通して共にすごしていく中で，子どもたちは，感動したことや楽しかった体験について，「すごい。」「おもしろかった。」「たのしかった。」等の言葉をつかって表現する。でも，個々の子どもたちは，同じ言葉を使いながら感じていることは異なっている。何回かくりかえしていく中で，自分の中では「すごい。」の内容が変容していても，同じ言葉で表現してしまいがちでもある。

子どもが言葉にこだわって，すなおに表現できるよう，また，じっくりと物事を観察しようとする姿勢を育んでいくことで，豊かな表現力を身に

つけさせたいと考えた。そのために，朝の会・終わりの会，学級活動の時間，他教科の学習ともリンクさせながら取り組んでいくこととした。

２．２．自然体験や人とかかわる活動の充実

２年生の教室は，目の前に学級園やまがたま池があり，自然がいっぱいである。子どもたちにとって，虫を捕まえたり，植物をとったり，水やりをしたりと，自然とふれあいやすい恵まれた環境である。自然の中で遊んでいる子どものすがたは本当にいきいきとしていて，目がキラキラしている。子どもたちの様子から，体験活動を充実させ，対象とのかかわりを深めることに重点を置いた単元を設定することが，気付きをうみだしたり高めたり，共有したりすることの必要条件になるだろうと考えた。

そして，朝の会や終わりの会での「みんなにお知らせしたいこと」で，自然体験を通して発見したことを，共有し合う場として活用し，子どもたちの興味関心をひろげることとした。

２．３．科学的なものの見方の基礎を育む

子どもたちが学習をつくっていく時に，思考がひろがりすぎてしまったり，課題からそれてしまったりすることがよくある。もちろん課題が何であったのか，もう一度振り返るということが大切になってくるが，２年生の生活科の学習活動の中では，「くらべる」「分類する」「たとえる」等の活動の意識化をはかることで思考の整理を行う。

このような「くらべる」「分類する」「たとえる」等，科学的なものの見方の基礎を育んでいくことは，３学年以上の学習にもつながっていくだろうと考えられる。

３．授業での取り組み

３．１．１学期の取り組みから

◇諸感覚をいかしての観察の定着

生活科の授業がスタートして，まず，トマト，ゴーヤ，ピーマン等の夏野菜を学級園で育て，観察をくり返し行った。子どもたちは「芽が出たよ。」「葉っぱが３枚になったよ。」など，絵と言葉で観察しながら，気付いたことを生活ノートにしるしていく。

図１　夏野菜の観察をする様子

子どもたちが観察記録を発表する際に，他の子どもたちは目をつぶって何の苗の観察なのかを想像するという活動をくり返し行った。すると，それぞれ異なるはずの葉の形や色のちがいがわかりにくく，はじめは何の苗の観察記録なのかがわからないものがほとんどであった。自分の記録だけで，何の苗なのかを相手に伝えるためにはどうしたらよいのかを，もう一度考え直し，見るだけでなく，においをかいだり，さわったりと諸感覚をいかすこと，大きさや高さを具体的に表現すること，何かに例えることなどを意識しながら，観察する姿がみられるようになった。葉の表の色と裏の色のちがい，葉や茎に毛が生えているものがあること，葉や茎のにおいがそれぞれ異なること，等にも気付きはじめた。トマトの葉っぱや茎から，まだ実がなっていないのにトマトのかおりがすることにも大感激であった。ゴーヤの葉の形もはじめは「おもしろい形」といっていた子どもたちが，「かえるの足みたいな形」「きょうりゅうの足みたいな形」とたとえて伝えようとしたり，手でさわってやわらかさや「ツルツル」「チクチク」と表現して伝えようとしたり，表と裏の色のちがいに注目して伝えようとしたりする姿がみられるようになった。

◇味覚実験を通しての表現から

５月に入り，様々な言葉を使って，自分なりの表現をたのしみ始めた子どもたち。みんなが共通してなじみのあるものをどう表現できるのかを学習として取り入れたいと考え，味覚実験を行うことにした。

まず，子どもたちが「あまい」という言葉からイメージする食べ物，「にがい」という言葉からイメージする食べ物を出し合った。「あまい」ものからは「べっこうあめ」と「黒糖あめ」，「にがい」ものからは「抹茶」と「コーヒー」をそれぞれ味わって，その味を言葉で表現してみることにした。

図２　味覚実験（にがいもの）する様子

「これも２Ｃルールで味わうんだね！」と，子どもたちにも諸感覚を活かしての観察のしかたが身についてきたようであった。

じっくりとみたり，粉をふって音のちがいを感じようとしたり，においをかいだりしてから，いよいよ口の中へ。「うわぁ～！」と声を上げながらも，首をかしげて味わい，味の表現を考える姿が見られた。「抹茶の味はゴーヤの苦さににているように感じたけど，コーヒーは何かこげたような苦い味だった。」「前に虫が食べていた葉っぱをちょっと食べてみたら“まずい！”って思ったんだけど，抹茶はその時のにおいや味に少し似てたよ。コーヒーは砂糖の入っていないチョコレートを食べたときのにがさに似てる感じだった。こおばしいようなにおいで。」「サラサラしているから，舌にのせたらコーヒーよりすぐに苦さがひろがってきて，いつまでも残った」「抹茶はよく飲むからにがくてもおいしいけれど，コーヒーはお母さんが魚を焼いてコゲコゲにしたときのにおいににてた。」等，自分の経験をいかしながら，伝え合う姿がみられた。

学習後の子どもたちからは，「にがいといっても，いろいろな苦さがあるんだなってわかりました」「葉っぱを食べたってびっくりしたけど，お茶も葉っぱだから似てるのかなと思った。」「○○ちゃんの“こおばしい”っていうのがすごくよくわかった。ぼくもそうだなと思った。」等の感想がきかれた。

３．１．２学期の取り組みから

～とっておきの秋☆み～つけた！～

本実践の主張点

秋を感じる活動を充実させ，発見したことをよりたくさんの人にお知らせする機会を持つことで，子どもたちが意欲的にわかりやすく伝えるための工夫をこらすことができる

10月に入り，子どもたちが季節の移り変わりを感じたり，ふしぎを感じたりしやすく，心地よく活動できる「秋」を思いっきり満喫したい。また，発見したことをたくさんの人にお知らせすることで“気付き”の質を高めたいと考え，単元を設定することとした。導入として，校内を散策し，耳を澄ませて音を聴いたり，空を見上げたり，風を感じたり，においを感じたり，風景を見渡しながら気付いたことを出し合った。

「蝉やカエルの声がもう聞こえないね。」「おうちのにわで鈴虫の声がきこえてきていたよ。」「空の色が夏みたいに青々していないね。」「じっとしていたら，あまり汗をかかなくなってきたね。風がさらっとしていて気持ちいいよ。」「そういえば，お弁当の果物に「梨」と「柿」が入っていたよ。これ，秋の果物なんだって。」「もうすぐ，うちのおばあちゃんちで稲刈りするんだよ。」と，日々の生活から季節の移り変わりを通して「秋」を見つける姿がみられはじめた。「とっておきの秋をみつけよう！」と，いろいろな場所での秋みつけがはじまった。

図３　校内で秋見つけする様子

図４　緑化センターで秋見つけする様子

図５　○店舗で生産者からお話をきいている様子

見つけた秋をもとに，葉っぱで洋服を作ったり，まつぼっくりやどんぐりでおもちゃを作ったり，教室を秋いっぱいに飾り付けしたり，秋をたのしむ活動を満喫した。自分たちが感じた秋，伝えたい内容がいっぱいだったので，「おいしい秋」「たのしい秋」「きれいな秋」「ふしぎな秋」の４つに分類し，伝えたい内容を整理して考えることになった。「おいしい秋」は，給食のメニューに「２Ｃ秋メニュー」を考え，取り上げてもらうことでお伝えすることになった。他の３つについては，体育館での朝の集会で，附属っ子みなさんにお伝えすることなり，子どもたちのお知らせ活動がはじまった。伝えるために，全体の内容を考え，

役割を分担し，衣装や伝えたい内容をグループごとに話し合い，まず学級内で発表し合った。

図６　グループで話し合い

図７　学級全体での話し合い

全体での話し合いでは，２色の付箋を利用して，“よくつたわったところ”（ピンク），“さらにパワーアップさせられるところ”（青）を，全員が伝えることで，グループごとのお知らせ内容をよりよいものにしようとした。伝える側にとっては簡単に書いて伝えられ，発表した側にとっては後に残るので，付箋を見ながらパワーアップを図ることにつながった。

図８　付箋を貼る様子

４．授業の考察　＝集会発表を通して＝

１学期の取り組みについては，３.１.項で述べたとおりである。繰り返し取り組んでいくことで，子どもたちの観察する姿や表現方法に大きな変容が見られていった。観察を記録している生活ノートを自分で見てみると４，５月のころ自分が書いた物と今を比べて「こんなんやったんや」と驚く姿が見られた。

２学期の取り組みのまとめとしての集会発表へ向けての取り組みでは，「グループでの話し合いと練習→全体での話し合い→グループでさらにパワーアップさせる」ことを繰り返して行く中で，日々意欲的になるこどもたちの姿がみられた。

例えば，まつぼっくりを紹介するグループの子がひらってきた松ぼっくりの中にたくさんの種が入っていることを発見し，朝の会でクラスのみんなに紹介した。種に羽がついていることに気付いた子どもたちは，その理由を考え，国語で学習した「たんぽぽのちえ」に結びつけて理由付けすることになった。すると，葉っぱのふしぎをクイズで紹介しようとしていた子どもたちが，「イチョウにはオスの木とメスの木があるって図鑑にあったよ。」「じゃあ，学校にあるイチョウはぎんなんの実がいっぱい落ちていたからメスの木だ。」「松はどうなのかな」とひろがっていったり，秋から冬にかけて，「新しい子どもを作るための準備をしているんだ」「はっぱの色がかわって落ちていくのは，おじいちゃんになったからと思っていたけど，寒いから春までお休みしているんだね」と，気付きを更新していく姿が見られた。

また，「秋をたのしもう」と人気のある曲とダンスを２Ｃ秋バージョンに歌詞と振り付けを考えていたグループでは，どんぐりチームと協力し合ってどんぐりのマラカスを作ろうということになった。発表をよりよくしたいという思いでパワーアップさせていった子どもたちだが，集会発表の２日前の提案にどうなるのかなと思ったが，全員が今からがんばりたい，少しでも自分たちの見つけた秋を知ってもらいたいという意見で，自主的に話をすすめて，行動することができていた。

集会発表では，自分たちが発見した「とっておきの秋」を，２Ｃ全員で全校児童にお知らせすることができ，保護者の方にも見ていただくことができた。自分のがんばりとみんなのがんばりに達成感を感じる子どもの姿を見ることができた。

５．成果と課題

子どもたちの“気付き”の質が，高まるだけでなく，ひろがりながら，しかも意欲的にたのしみながらとりくんんでいけたことは大きな成果だと感じられた。

豊かな表現力をねらいとして，合科を取り入れながら言語活動に力を入れたこと，諸感覚を活かしての観察やものの見方を取り入れたことで，大きな成果が得られたのだと考える。

今後の課題としては，「科学的なものの見方や考え方」の育み方を検討していく必要があるということである。「くらべる」「たとえる」活動の意識化は，子どもたちの観察力や豊かな表現につながったであろうと思われるが，「分類する」については，なかなかまとまりにくく，子どもたちがすっきりと整理できたかどうかには疑問が残ると感じている。

そして，何より学級風土作りの大切さもはずせない要素であると再認識した。

参考文献

木村義彦　編著．（2008）『小学校　新学習指導要領の展開』生活科編．．明治出版

内藤博愛　著．（2009）『新しい生活科の授業デザイン』　明治図書